

2017年度「異文化理解」海外研修 in Bari 報告 (2018年3月2日～3月8日) ～在デンパサール日本国総領事館表敬訪問報告～

小澤 和 恵
(こども学科 教授)

3月5日、在デンパサール日本国総領事館を訪問した。

まず、首席領事の大橋領事から「バリ州情勢ブリーフ資料」をもとに、インドネシアの状況などの説明をいただく。

バリ島(州)は、ジャワ島の東側に位置し、東西5,000kmの島で、面積は東京都の2.5倍である。気候は、5月から10月が乾季で、11月から4月までが雨季である。宗教について、インドネシアは90%がイスラム教で、バリ島は、バリヒンズー教が83%だそう。バリ島のお正月ニュピ祭が、今年は、3月17日だそうで、その日は精神修養の日として、全島民は一切の活動を中止し、当日の夜明けから翌日の夜明けまでは、火や電気を使わず、家の中で断食と瞑想で静かに過ごすそうである。暦について調べると、バリ島の人々は、「ウク暦」と「サカ暦」の二つの暦に従って生活しており、ニュピは、その「サカ暦」の新年にあたる日で、バリ・ヒンドゥー教徒にとってとても必要な日であることがわかった。

2017年に噴火が報じられたアグン山について、現在は噴火警戒レベル3ということで、火口から半径4kmが立ち入り禁止の規制されている。アグン山は、神々の山と言われており、古くから信仰の対象とされている山である。

今年は、統一地方選挙の年で、6月27日に州知事、県知事、市でも、一斉に首長を選ぶ選挙があると

の事だった。

主要産業は観光と農業で、2017年の外国人観光客は年間約570万人、国内旅行者数は約870万人である。主要輸出品は水産物や宝飾品などで、冷凍マグロの3割は日本向けである。

バリ島での日本人の在留状況は、2017年ベースで2,884人、10年で倍増したそうである。主に観光に関わる仕事に就いており、その他、国際結婚や日本で定年終えて暮らしている方が多いという話だった。

バリ島での日本語教育について、小学校、中学校、高校で取り入れているところも多く、特に、高校では日本語を必修にしているところも多いそう。国際交流基金(ジャパン・ファンデーション)では、日本語パートナーズ派遣事業を実施しており、今年、バリ州には12名の日本語パートナーズが赴任し、日本語教師や日本語授業のサポート、日本領事館の仕事の手伝いにあたるそうである。

その後、私たちからの質問にお答えいただいた。

Q. アグン山の噴火などもあり、日本でも何かできることはありますか？

A. NPOなどの団体を通してやっていただけることもあるかと思うが、日本からしてほしい支援がある時は日本インドネシア大使館に伝えているし、日本からしたいことがある時も、

日本インドネシア大使館に申し出てほしい。

Q. 観光客が一番多く来る季節は？

A. 日本からは、やはり、ゴールデンウィークや夏休みや春休みが多いです。

Q. 治安維持のために、テロ対策を含めどのような対策を取られていますか？

A. 外国からの入国（特にシリアから）や、一度インドネシアからシリアに行き帰ってくるインドネシア人の帰国について、水際である空港や港のチェックを強化しています。少し前も、シリアから帰国した5人家族を拘束して、ジャカルタに送検しました。潜伏している可能性も考え、テロ分子を如何につかんでいくか、常に対策を取っています。

Q. 日本の選挙権は18歳になりました。統一地方選挙があるというお話がありましたが、イン

ドネシアの選挙権は何歳からですか？

A. 17歳です。17歳になると車の免許も取れます。

Q. 児童養護施設のようなものはありますか？

A. 財団や他国からの補助でいくつかあります。里親制度のようなものはあまりありません。

Q. 日本に留学したい学生などの支援や審査はどのようになっていますか？

A. 日本留学生協会やJASSO（日本学生支援機）などから様々な情報提供がされています。また、国際交流基金による日本語パートナーズも支援できる体制であります。日本語能力試験で、N2以上は必要でしょう。

バリ研修も3度目となり、バリの様々な機関とも友好関係ができてきた。今後、さらに交流を深めて、お互いに学び合う環境ができるようにしていきたいと感じた。

